大原やすおの議会報告

絶対にあってはならない健康診断での事故
―9月議会で疑問点を指摘し質問―

レントゲン写真のパネルを掲げ説明、質問する大原議員

Aさんは福岡市主催の「胃がん検診」で大量のバリウムが肺に流入するという事故に遭われ、そのバリウムを取り出せないまま 5 年後の昨年夏、急性呼吸不全によりお亡くなりになりました。

Aさんはご主人の退職を機に、ご夫婦で故郷の自然や歴史を子どもや孫たち世代に繋いでいこうと、各地域のイベント会場に出向いておられました。なかでもお二人が最も楽しみにしておられたのが遊びを通して子どもたちとふれあうことでした。子どもにも大人にも人気で皆を夢中にさせていました。

お二人は、健康には特に気を使い、健康診断は毎年欠かさず受けておられました。事故はその健康診断で起こりました。

その後入院治療となり、「胃ろう」の手術をするほど重篤な状態になりました。それからの 5 年間、治療やリハビリに励んでこられましたが叶わぬ結果となりました。

Aさんは私に「二度と私のような苦しみや無念さをあじわう人が出ないようにしてください」と語っておられました。また、Aさんのご主人から「5 年前から事故の対応について市に説明を求めているが『受診者の自己責任』という回答には納得がいかない。何とか事故の真相を究明していただきたい」と相談がありました。

シュロの葉でつくったバッタ

私は9月議会で「バリウム流入事故の原因やなぜ救急車で搬送されなかったのかについて」多くの資料を基に疑問点を指摘し質問しました。答弁で「事業団と協議の場をもち二度と集団健診で事故が起こらないように努める」との約束をいただきました。

ことの重大さを察知した新聞各社にも取り上げられ、検診実施機関の理事長の目に留まりました。調査の結果、事故が報告されずに処理されていたことが分かったそうです。理事長は早速、体制の見直しと再発防止案を作成し故Aさん宅を訪問されました。ご家族に書類を渡し「事故の再発防止と事業団内の改善をおこなう」ことを約束されたそうです。

健康を願って受ける健康診断で起きた事故です。関係部署でこの事故の原因究明を進めていただき二度とこのような痛ましい事故が起きないよう今後も市議としてしっかり見極めていきたいと思います。

議会質問

議会では胃がん検診での誤嚥事故の他に下記の件について質問しました。

福岡市における木材の利用促進について

森林は木材の生産だけでなくCO_2 吸収による温暖化防止や豪雨による災害防止など多面的機能を持っています。木材価格の低迷から山林が放置され荒廃、その機能が低下しています。木材の利用促進は林業の活性化だけでなく、その機能を回復することができます。先ず市の公共建築物の木質化を進めることが重要です。

福岡市に国内観光客を誘致する観光資源の掘り起こしについて

市内には観光客をひきつける名所旧跡が無いと言われますが、古代より大陸との交流も盛んで、わが国最古の王墓と言われる吉武高木遺跡をはじめ、元寇防塁や神社仏閣など歴史にまつわる遺跡も数多くあります。これらの観光資源を掘り起こし、歴史と自然を生かした観光都市福岡としての新たな魅力づくりをすべきではないでしょうか。

脊振山系にスーパー林道が完成

二酸化炭素削減、地球温暖化防止にも繋がると期待

脊振山系の林業活性化と環境保全・水源涵養（かんよう）・水害防止など多面的機能を充足させるためのスーパー林道（早良基幹林道）が完成しました。脊振山系の中腹を横断する曲渕（三瀬峠下）から脇山（椎原）までの約 15 ㎞。10 年ほどの予定でしたが財政事情や集中豪雨での崩落などで着工から 21 年目にしてようやく完成いたしました。

このところ、温暖化の原因とされる二酸化炭素（CO_2）を吸収する森林の役割に大きな期待が寄せられています。しかし、長年放置され荒廃した森林はCO_2の吸収率が減少しています。早良基幹林道が完成したことで森林整備や伐採の効率が飛躍的に伸びるものと期待されます。

市民が楽しめる道路としての活用も視野に

この林道をマラソンの練習や大会にも利用できるのではないかと元マラソン選手の重松森雄さんから提案がありました。ボストンマラソンで優勝しウインザーマラソンで世界記録を更新した重松さんは背振の林道を走り続けたことで足腰が鍛えられ世界記録に繋がったと語っておられました。

林道からは福岡市が一望できます。空気もきれいでマラソンには最適かもしれません。

このように基幹林道が林業の作業道だけではなく市民の皆さんが楽しめる道路としての利用方法を考えてみるのもいいのではないでしょうか。

さっぱりわからん「カタカナ語」…私たちに解る言葉を使って！

■カタカナ言葉の拡散（オーバーシュート）

パンデミック、アラートなど新型コロナウイルス感染症拡大とともに多くの聞きなれないカタカナ語が飛び交っています。高齢の男性から私に「ニュースで『クラスター』とか訳のわからないカタカナ語で説明されるけど、わかる言葉で説明してくれるように言ってくれないか！」と抗議の電話がありました。感染症の予防を注意喚起する言葉がカタカナ語、それも聞きなれない言葉のため特に高齢者は意味が解らず苛立ちと不安が募るばかりです。

これが公的機関や、新聞など報道機関でも何の注釈もなく使用されているのです。行政側は危機管理責任を果たしているのかとの疑問を抱きます。もっとわかりやすい日本語があるのにと更に疑問が湧いてきます。

■意味不明なカタカナ語は増えるばかり

私も 3 年前の議会で、市の行政文にはカタカナ言葉が多すぎると疑問を投げかけました。答弁では中央官庁が使用しているため使わざるを得ないとのことでしたが、市民が理解できないと自己満足で無意味ではないかと反論しました。しかしながらその後も相変わらずカタカナ語は減ることもなくむしろ増えるばかりです。

国際化が進む中、やむを得ないところもありますが、このままだと自然や人間の五感を研ぎ澄ませ素晴らしい表現ができる日本語が忘れられていくのではないかとの危機感がつのります。

コロナ関連カタカナ語

オーバーシュート
予測を超えた感染者の爆発的な増加。
アウトブレイク（一定地域の集団で突発的な発生）やパンデミック（世界的な大流行）と使い分けられている

クラスター
集団感染。果実や花などの房、集団や一団という意味を持つ単語で、科学や天文学、ITなどの分野でも使われている

ロックダウン
都市封鎖、強制的な移動制限の発動。
ただし、法律の違いによって罰則付きの外出制限など海外で実施される大規模なロックダウンは日本では行えない

ソーシャル・ディスタンス
感染拡大を防ぐため、人と人との物理的距離を保つこと。自治体などは目安として1～2㍍の距離を保つよう推奨している

COVID（コビッド）-19
新型コロナウイルス感染症のことで、新型コロナウイルス自体の名称は「SARS-CoV-2」

マグニチュード
エネルギーの大きさを示す尺度。地震以外にも音や痛みの大きさなどを示す際にも使われる